

## 要約

論文題目：現代中国語における受身表現に関する研究

—非典型的な事例を中心に—

氏 名：路 浩宇

本研究は、現代中国語における非典型的受身表現に関して考察するものである。

中国語の受身表現については、数多くの著作や論文がこれを取り上げ言及している。例えば、早期のものでは、王还（1959）が「“把”構文」と「“被”構文」の文法的特徴を対照分析し、「“被”構文」の主語になる成分は「“把”構文」の目的語と同じように、「定」でなければならないと指摘している。王力（1957）と橋本（1987）は受身表現の通時的変化を巡って、受身のマーカーが文法化する過程を考察した上で、共時態との関係に言及している。しかしながら、コーパスを利用し、実際の用例を観察してみると、先行研究の結論に当てはまらないケースがしばしば見られる。例えば、马真（1997：165）や王还（1983）等は“被”構文における動詞は他動詞でなければならないと指摘しているが、実際には、受身文の述語に自動詞が用いられるケースも存在する。

(1) 钢铁大亨发妻“被离婚”。（新浪网）

[鉄鋼ボスの妻が「離婚を強いられる」。]

また、黄伯荣・廖序东（2003：125）や李珊（1994：39）等は受身文の主語になる名詞句は必ず定でなければならないと主張しているが、不定名詞句が用いられる例文がコーパスでは散見される。例えば

(2) 在昨天的枪击案中，一名妇女和一名 13 岁的中学生被打伤。

（新华社 2002 年 10 月份新闻报道）

[昨日の銃乱射事件では、女性一名と 13 歳の中学生一名が撃たれ負傷した。]

以上のような言語事象から、典型的な受身文とは異なる文法的特徴を有する受身表現が確かに存在することが分かる。本研究はこうした非典型的な受身文の構文的特徴と語用的特徴を研究対象として、主に統語論の手法を利用すると共に、認知言語学や語用論的な観点を援用し、論を展開していく。

本研究の第 1 部～第 4 部では、受身表現を構成する主語、述語、目的語、受身のマーカーなどの要素における非典型的なタイプを中心に上げ、そのような用法が派生する動機付けについて、統語論、語用論的な観点から明らかにする。そして、第 5 部ではそれまでの考察結果を踏まえ、受身範疇に見られる意味拡張のプロセス、および典型から非典型への連続性を考察する。

まず、序章では本研究の目的と方法について述べる。主な考察対象である「非典型的な

受身文」を定義する。

第 1 部では、主語に不定名詞句が用いられた受身文を主語の機能によって特定の事象と不特定の事象を表す二つのパターンに分け、それぞれの形態的特徴と語用的特徴を分析する(第 1 章)。また、事故・事件が報道される際の新聞やニュースという語用環境において、不定名詞句が用いられた受身文が有する情報伝達機能について考察する(第 2 章)。第 3 章では主観性という観点に着目し、無情物が受身文の主語となる際に、本来言語化されていない発話者の嫌悪感が生起する動因を究明する。

第 2 部(第 4 章～第 7 章)では他動性の度合いが異なる動詞の受身文に対する受容条件と容認の度合いを考察する。通常、受身表現で用いられるのは他動性の高い動詞であり、他動性の低い動詞は受身文の述語にはなれないとされている。しかしながら、近年では、他動性の低い動詞が用いられる受身文も頻繁に使用されるようになってきている。本研究では、まず、受身文の成立を担うとされる他動性の高い動詞が兼ね備える「動作性」と「結果性」の働きを明確にする。その上で、他動性の低い動詞は「動作性」と「結果性」を表すことができないにもかかわらず、それが用いられる受身文が依然として成立する条件を統語論的な観点から検討する。また、インターネットで用いられる自動詞、名詞、形容詞といった非他動詞が述語となる受身文の形態的・統語的・意味的特徴を示し、このような表現が受身という範疇ではどのように位置付けられるのかを明らかにする。

第 3 部(第 8 章、第 9 章)では受身文で第一人称の仕手目的語が用いられる動機付けを考察する。第一人称はシルバースティーンの名詞句階層において、もっとも左側に位置付けられている。左側にある要素は一般的に発話の起点として、SVO 構文の仕手になりやすく、受身表現の目的語としてはもっとも捉えられにくいものである。しかし、中国語の受身文においては、第一人称の“我”が支障なく仕手として用いられるケースが見られる。“被我”が用いられた受身文では発話者が仕手と同一であるため、直接的意識が優位に立ち、「自己称揚」や「自己批判」といった発話者の主観的感情が表されるのである。典型的受身表現と比べて、第一人称が用いられる受身文の非典型性は、発話者が背景化された受動関係において、主観的感情を表すという側面に反映される。

第 4 部(第 10 章)では、使役義との関連において、“让”構文と“被”構文の表す受動義の相異を明らかにする。[-有生]、[-意志性]の意味特徴を有する名詞句主語が用いられる“让”構文では、その NP<sub>1</sub> の後ろに名詞句が加えられない場合、受身のみが表される。一方で、NP<sub>1</sub> の後ろに働きかけを表す名詞性成分が挿入できる場合、使役と受身の意味が同時に表され、多義が生じる可能性がある。“让”構文が受身を表す場合、被害のほかに発話者の受け手に対する非難のニュアンスをも表すことになる。これは受身を表す“被”構文が不具备していない語用論的な特徴である。

第 5 部(第 11 章)では、プロトタイプ理論を援用して、本研究で取り上げた諸事例に見られる意味拡張を総括し、非典型的な受身の諸成員の間に見られる連続性の体系化を試みる。

現代中国語における受身文を論じた先行研究は数多く見られるものの、そのほとんどは受身の表す意味、統語的制約、或いは他動性（transitivity）が統語構造に及ぼす影響といった観点から論じられてきた。本研究は先行研究では説明できなかった周辺的な受身に関する言語事象に目を向け、より包括的な受身範疇の確立を目指した点に、その独創性を見出すことができると言える。

非典型的な受身表現が使用される動機付けを解明する際には、それが用いられる発話環境という語用論的要因に加えて、「発話者の感情」を考慮する必要がある。従来の受身表現の研究においても主観性という認知メカニズムとの関連については指摘されてきたものの、非典型的な受身表現においては、この主観性が統語構造により強い影響を与えることになるものと考えられる。